

島崎藤村と音楽(抜粋)

田中吉徳

はじめに

藤村堂のある旧長野県木曾郡山口村(含馬籠)が岐阜県の中津川市に越県編入されて廃村となったのは、今から六年前の平成十七年二月十三日のことだが、当時の長野県知事田中康夫氏が最後までこの越県編入に反対し続けた理由は、この藤村堂の貴重な文化財が岐阜県側に移管されて、果たして効果的に活用し続けられるかということであった。

その後中津川市でも記念行事を持ちたり、伝統ある「藤村学会」の研究会場を招致したりと努力はしているが、馬籠の石畳の坂道を歩いて、周囲の店を散策する観光客は多数あっても、藤村堂を訪れる人は極めて少ないように思われる。

ところで、私は六年前から奉仕活動として、地域の皆さんに、日本の歌の歴史的背景や歌詞の意味を解説しながら、楽しんで歌っていただく「みんなで歌おう懐かしき日本の歌」という「歌う会」をやっているが、この活動の中で特に島崎藤村の歌詞による歌曲には大きな比重をかけており、まず、自分が彼の代表的な小説や詩を読むことから始めて、交流の深かった同時代の作家や音楽家の作品を調べたり、藤村の書簡集や年賦、それに彼の書いた演奏会評等にも目を通していく内に、音楽をやった者でないと気づきにくい、藤村が西洋の音楽に強い関心を示したいいくつかの事例を発見したが、次に、それらの事例を示すことで、彼の明治から昭和の戦前にかけての西洋音楽との関わりがどのようなものであったかを紹介したい。

<藤村と西洋音楽との関わりを示す事例>

●明治十四年(九歳)に郷里の馬籠から上京した藤村は、姉園子の嫁ぎ先の高瀬薫宅に預けられ、ここから泰明小学校に通ったが、この学校ではまだ唱歌の授業はなかった。次の年に高瀬家が木曾福島に帰ったので、今度は親戚の力丸元永に預けられるが、ここも一年足らずで明治十六年には高瀬家の同郷の人で、銀座で弁護士をやっていた吉村忠道方に移っている。

彼は明治二十年(十五歳)に明治学院に進学したが、ここで初めて西洋音楽に出会い、賛美歌を聞き、また自分でも歌ったのだが、この学校へ入学した頃のことを二十六歳の時に書いた小

説「桜の実の熟する頃」の中で次のように書いている。「多勢いる娘たちの文学界に招かれて行き、若い男女の唇から英語の暗誦や唱歌を聞いた時は、殆んど何もかも忘れていた。楽しい幸福は至るところに彼を待っていたような気がした。」

ところで、この学校には神学部と普通部があり、彼は普通部に入って、和漢文、数学、地理、世界史、天文学、物理、心理学、倫理学、簿記、理財学などの一般科目を勉強したが、ここでは殆んどどの授業が英語で行われていた。しかし藤村は入学前に芝の三田英語学校等で英語の力を十分つけていたので、この学校の授業を受けるには問題はなかった。又、こうした科目の他に、この学校には週三時間の音楽の授業があり、この授業が三年間続けられており、その内容は米人教師による賛美歌を教材にした歌唱指導で、読譜指導もあった。

●明治二十五年(二十歳) 明治学院を卒業して一年が経過したこの年の十月に、明治女学校の英語教師の職を得るが、彼が激しい情熱を燃やした女性佐藤輔子(永遠の恋人)はこの学校の生徒であり、彼女がオルガンが大好きで、熱心に練習をしており、上野の音楽学校に入学したいという夢を持っていたことから、この時期に藤村は音楽に関する知識を急激に身につけていった。ところが、この恋愛は教師にあるまじき不詳事件として、彼は翌年の一月末には、この学校を辞職させられ、輔子はこの学校を卒業後、音楽学校へは行かずに結婚した。しかし、不幸にして三ヶ月後に病気でこの世を去った。

藤村は輔子の音楽学校進学の実意を理解せぬまま、彼女との共通の話題を作るのが目的で音楽の勉強に大きなエネルギーを注いだ。彼女の目的はオルガンの演奏技術や英語力を高めて、キリスト教の布教に役立てることであった。

●明治二十五年に創刊された雑誌「文学界」には新進気鋭の作家達が参加したが、この中にいた上田敏はピアノやヴァイオリンの演奏に秀で、専門家に近づく程の腕前だったと言われていたことから、彼との交流を通して藤村の音楽に関する専門知識が急速に高められ、音楽学校の奏楽堂での演奏会にも足しげく通っていた。この頃のことを書いた藤村の小説「春」にはお雇い外国人教師デイトリッヒの送別演奏会を聞いた帰りの会話として「かの音楽者が一挺のヴァイオリンを携えて、奏楽堂の白壁前に立って、小指一本で八音上下した時は、スラーあり、トリルあり、半音階を迅速に上がっていく等、思わず耳を熱した。」と書いているが、この頃、藤村と文学仲間が東京音楽学校ピアノ科助教授で、佐々木信

網門下の歌人だった橘糸重と交流したことも、藤村にとっては音楽・文学両面の大きな刺激となっていた。

●明治二十九年(二十四歳)仙台の東北学院の作文教師として九月に赴任、彼はそれまでは楽器に触る気配も見せなかったが、ここにきてヴァイオリンに手を染め出す。十一月上旬頃から住みはじめた素人下宿三浦屋に下宿していた時に、そこの娘キクヨの弾くこの楽器に興味を持ち、この楽器を借りて自ら練習を始めた。キクヨは東京音楽学校でこの楽器を専攻した師範学校の先生にヴァイオリンを習っていたので、彼女に教えてもらいながら弾いていたのだが、藤村の熱の入れようは大変なもので、自作の詩を作曲するような朗読風な弾きかたで、声を出しながら弾いていたと伝えられているが、藤村にとっては、詩そのものが音楽であり、音楽そのものが詩であったとも伝えられている。この頃に作った彼の詩の中に、琴(ヴァイオリン)に彼の心の赴く様子を窺い知ることが出来る。

〈明星〉

小夜には小夜のしらべあり
朝には朝の音もあれど
星の光りの糸の緒に
あしたの琴は静かなり

〈草枕〉

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聴き
悲しみ深き吾目には
色彩(いろ)なき石も花と見き

この他「潮音」、「天馬」の詩にも琴、弦という楽器音が使われている。

仙台はたった一年の滞在だったが、藤村はこの地の文学仲間から高く評価されて、積極的な活動が出来たし、音楽鑑賞の面でもこの地に住んでいた外国人による演奏会に積極的に出かけ、音楽に対する関心も高まっていたが、文学者としては、この地で「若菜集」の大半の詩を作ったことが大きな成果だった。

●明治三十年(二十五歳)東京音楽学校選科へ入学。藤村文学の権威 瀬沼茂樹は音楽をより深く学ぶことで詩形の固定化を打破しようとしたのだと書いている。この学校での体験は連作短編集「食後」の中の第九話「少年」に収められており、「自分は不得意な音楽で押し通そうか、それとも好きな文学の方へ行こうか、思い迷っている…」という悩みは、藤村自身のものだったと伝えられている。

又、彼が東京音楽学校で何をどの程度まで

学んだかは明らかではないが、この頃近くにいた媼から聞き取った記録には、「ピアノの先生は橘糸重と幸田延(露伴の妹)、ヴァイオリンは幸田幸子(露伴の妹)で、学校の中ではあまりお上手ではなかったので、合唱以外にはステージにお立ちにならなかった。」と書かれているが、最近になって、ヴァイオリンではドルドラ作曲の「スーベニール(思い出)」を弾いていたという記述を発見した。又、この媼からの再度の聞き取りから、藤村が音楽学校の図書館で音楽関係の書物を読むことに熱中していたことも分ってきた。

●明治三十一年(二十六歳)詩人・劇作家として知られる高安月郊から送られた楽譜に対するお礼の手紙文「御手紙並にワグネル詞曲届き居り御厚情の程奉深謝候。タンホイゼルは多年見たしと思ひ居り候ところ、御賜りを蒙り、珍しきものを手に入れ、まことに喜び居候。熱讀愛賞可致候。」も残されており、ワーグナーの歌劇への関心が伺えるが、高安月郊には梁田貞が作曲した、フルート助奏付の名歌曲「昼の夢」の作詞もあり、彼も西洋音楽への関心が高く、娘にピアノを習わせていて、後に藤村のパリ土産の「子どもの領分」の楽譜をもらうことになるが、更に後には、この娘が東京音楽学校でピアノを専攻して卒業し、作曲家の弘田龍太郎と結婚している。

●明治三十四年(二十九歳)シューベルトの歌曲「海辺の曲」の作詞。藤村の詩としては、終わりに近い作品と思われるが、かつて東京音楽学校の奏楽堂で聞いたドイツ語の歌曲と思われる、この歌の日本語歌詞を作り、楽譜付で「落梅集」に収めている。この歌の原曲はハ長調だが、藤村はこの歌の響きがよいのは変ロ長調で歌われる時だということを知っていて、わざわざこの調子に移調して歌詞をはめ込んでいる。

●大正二～五年(四十一～四十四歳)パリでの音楽鑑賞。姪のこま子との「新生事件」から逃避して渡ったパリでは、グノーの歌劇「ファウスト」、イザイのヴァイオリンリサイタル、晩年のサン＝サーンスの指揮による管弦楽演奏会やドビュッシーによるピアノ演奏会、セザール・フランクの宗教音楽の演奏会等、数多くの音楽を鑑賞しているが、ドビュッシーの音楽を特に好んだ藤村は、彼の肖像画や音楽会のプログラム、それにレコードと楽譜を日本に持ち帰っており、「子どもの領分」の楽譜を日本に最初に持ってきたのは自分ではないだろうか、と作曲家の諸井三郎に話している。

●大正十年(四十九歳)弘田龍太郎に「千曲川

旅情の歌」の詩の作曲を依頼する。

この年の八月に軽井沢で最初の芸術教育講演会が開催され、北原白秋、島崎藤村等と共に、二十九才の若さで弘田龍太郎も講師として招かれていたが、これがきっかけとなり、藤村が彼に自信作のこの詩の作曲を依頼している。藤村は詩にメロディーをつけて歌曲として発表することの効果をも十分に理解し、日本人の心を捉える龍太郎の高い作曲技術を評価して、この詩の作曲を依頼したと伝えられているが、この時、龍太郎は軽井沢に山荘を持っており、ここで、この詩の中の「小諸なる古城のほとり」と「千曲川旅情の歌」の構想を練って作曲しているが、この頃には藤村も歌曲についての可なりな知識を持っていたことから、事前に龍太郎と話し合いをしたものと思われる。

●昭和の初め頃(藤村五十四歳の頃)、郷里の馬籠に帰農させた長男楠雄宛てに何枚かのSPレコードを送っているが、この中にショパンの「葬送行進曲」とエチュード「木枯」、ドビュッシーの「ノクターン第一」と「雲の曲その一と二」、同じく「牧神の午後への前奏曲」、ワーグナーの「歌劇タンホイザーの序曲と大行進曲」等の名曲があった。

●ルソーの「告白」と音楽

藤村がルソーの「告白」を読んだのは明治二十七年(二十三歳)の時だと伝えられているが、「告白文学」の最高峰と言われるこの作品が以後の藤村の小説(自然主義文学)に与えた影響が多大なことは、彼のその後の作品を読めば理解出来るが、「告白」の随所に現れるルソーの音楽活動について藤村がどのように感じとっていたかは、私の知る範囲では明らかにされていない、しかし、ルソーの幼少期の音楽環境、独学で音楽の基礎知識を身につけ、当時のフランスの大作曲家ラモーの対位法という作曲の技術まで身につけ、ついにはオペラ(歌劇)まで作曲して、パリのオペラ座での公演までやり、百曲以上の歌曲を作曲したルソーの音楽活動に気づかない筈はないように思われる。音楽に関するはっきりした記述は小諸時代までしかないが、藤村が終生ルソーのありのままの生活を書いたこの「告白」を大切に読み返していたと伝えられていることから、ルソーから音楽面でも可なりな影響を受けていたことは間違いないと思われる。彼がフランス語の歌詞とメロディーは結びつきにくく、イタリア語の歌曲が最も音楽的だと書いていることも、日本語の歌詞とメロディーとの関わりを研究していた藤村には興味深いものだったと思わ

れる。

おわりに

幾多の家庭的・経済的な艱難辛苦を乗り越えて、数多くの詩や小説の名作を残した島崎藤村の憩いのひと時は、書画と名曲の鑑賞だったようであるが、音楽の知識としては、明治から昭和の戦前という時代背景を考えれば、可なり高いものだったように思われる。又、音楽に関して彼に大きな影響を与えた文学者の上田敏は、「藤村は類稀な芸術的直観力を持っている。」と言っている。

ただ、彼には音楽学校で見聞きた体験もあり、自分は音楽を専門に勉強したレベルの者ではないという、遠慮のようなものがあって、音楽の表現については、わかっている、あまり深くを書かず、会場や演奏者の様子を書いたものが多い。

〈参考文献〉

藤村全集全十九冊(筑摩書房)、「藤村の秘密」西丸四方著(有信堂)、「島崎藤村詩集」(岩崎書店)、「藤村のパリ」河盛好蔵著(新潮社)、「西洋の音、日本の耳」中村洪介著(春秋社)、「父藤村への思い出と書簡」島崎楠雄著(藤村記念館)、ルソー著・桑原武夫訳「告白」上・中・下(岩波文庫)、瀧井敬子著「漱石が聞いたベートーヴェン」(中公新書)、「島崎藤村の仙台時代」藤一也著(萬葉堂出版)、「藤村とルソー」小池健男著(双文社出版)、他多数。